

図画工作部会

< 県研究主題 >

豊かに感じ取る力を育てることを重視し、児童一人ひとりの資質や能力の育成を図る学習指導と評価の工夫・改善

提案 1

提案者 山本 雄一（県央地区）

< 研究主題 >

自分の思いを伝えよう

— 造形遊びを通して、豊かに感じ取る子どもの育成を目指して—

1 提案内容

(1) 研究の取り組み

①指導法の工夫・・・材料の提示方法や活動の導入

②言語活動の役割・・・言語活動の表れを分析

A直接的言語活動（鑑賞、つぶやき、相談などの音声）

B間接的言語活動（内言、視覚的言語活動）

(2) 授業実践

①題材名 「みんなでどんどんむすんでつないで」 4 学年 表現 A-（1）

②指導の工夫

1. 場の工夫

学校の近くの「三つ矢の森」で木の枝を拾わせる。それらの木の枝と触れ合わせる。図工室前面に枝コーナー、紐コーナー。枝切りコーナーには剪定バサミを用意。

天井から針金やS字フックを下げ、ロープをはって作品を自由につり下げることができるように工夫。床を使って作業できるように活動スペースをとる。

2. 活動やイメージを広げるために

枝と枝のつなぎ方、結び方の例示。麻ひも、針金など結ぶ材料も自由に選ばせる。

友だちの作っている様子が見えるように空間配置を工夫。子どもたちの結び方を多く紹介。

(3) 研究の成果と課題

材料を身近な森からとってきたことで、意欲をもたせることができた。活動していく中で、どんどん新しいつなぎ方を見つけてく様子が見られた。友だちとの関わり合いや、教師の声かけなどを通して、発想が広がっていった。言語活動を記録し、どの場面でどう思っていたのかをとらえられてよかった。導入時に、発想の広がりをもてるような工夫をすることが大切で、もっとつなげる活動を支援したり、他者のつなぎ方のよさを共有したりすることができるとうよかった。

2 協議内容

・言語活動のAとBはどういう根拠でわけているのか？

→A直接的言語活動は、子どもたちが言葉を発した時に、より発想を広げられる。B間接的言語活動は、心の中に思っていて言葉には出ないが、考えていることも、発想を広げる上で有効である。

・材料を集めるために森に行くときに、どんな投げかけをしたのか？

→くわしく言わずに、「図工で使うよ。」とだけ投げかけた。

・活動場所を図工室にしたわけは？

→子どもたちどうしが、関わり合いをもちやすいように。

・言葉の少ない子への手立てがあれば教えてほしい。

→教師が困っていないか確かめ、安心させる言葉かけをする。必要なことがあれば、自由に話してよいということを全体に話している。

・子どもの概念をくずすには、どのような手立てが必要か？

→森の中で作らせるとよかった。造形遊びは自由性がほしい。枝と遊ぶ中で森の木を使って、もっとダイナミックな活動もできる。

→造形遊びの中身が大切。質的な問題。目的は何か。授業では、図工室にロープがはってあった。つりさげたい子はつりさげることができて、イメージに広がりが出た。概念をくずすのは難しいが、活動の意欲を高めていくとよい。

3 まとめ

・自分でイメージをもてる子を育成しようという指導要領のねらいを大切にしたい授業だった。

- ・森へ行って枝を集める所から、子どもたちは感覚を通して感じつくりたいと思い始めている。もうその時から授業が始まっているという構えを、教師がもつことが大切である。
- ・発想、構想の時間を大切に。造形遊びはどんどん変化していくつぶやきを見取って生かしてほしい。
- ・この恵まれた環境を生かし森の中で授業をすることができたならば、この子どもたちなら、もっと自由につぶやき、より豊かな活動ができたのではないか。

提案2

提案者 石川 裕貴 (川崎地区)

〈テーマ〉
つくりだす喜びを通して、豊かな心をはぐくむ ～ふくらむ思いをかたちにかえて～

1 提案内容

(1) 研究の視点

【視点①】 「思い」を「ふくらませる」

- ・ 「発想、構想の能力」が子どもの自発的な学習によって高まっていくような題材開発。
- ・ 「思い」を「ふくらませる」ための授業づくりのポイントを、各学年の目標及び内容の系統と合わせて見直しをする。

【視点②】 「ふくらむ思い」を「かたちにかえる」

- ・ 子どもが「創造的な技能」を発揮しながら「ふくらむ思い」を「かたちにかえる」際のでがかりとなるものを探り授業づくりのポイントを考える。

(2) 研究の実践

①題材名 「線を集めて ～自分だけの建物をつくろう～」

5学年 A表現(2) B鑑賞(1) 立体に表す

②題材のねらい

- ・線が集まると立体になることに気づき、線材の組み合わせ方やつなぎ方を試しながら、自分が美しいと思う立体に表す。

(3) 研究の成果と課題

成果・ 言語活動を通して自分自身の思いや表現主題を見付けられるように授業の内容を工夫した。友達の活動や作品から学び合っている姿がみられた。言語活動を通して、自分の表現を深めていた。

- ・線材とかかわる時間を存分に設けたので、その材の特徴を生かした発想や技能が生まれていた。また、ホットボンドは3～4人に2本ずつ使えるように準備したため、活動が停滞することなく没頭することができていた。

- ・デザインのポイントとして、奥行き、バランスという視点をもてるように指導した。導入では、ポイントが伝わるような建物(立体)の写真を提示し、線材でできた作品の美しさを自分で感じられるようにしたことで、子どもが活動のねらいをつかむことができた。

課題・ 言語活動が目的とならないようにする。授業の中での言語活動の活用の仕方。

2 協議内容

- ・表現に困っている児童に対してどのようなアドバイスをしたのか。

→初めから一つの形にすることを考えるのではなく、組み合わせでできそうな形を試してみるなど「いろいろやってみてごらん」といった声かけをした。また、ボンドで固めてしまうのではなく、マスキングテープで仮止めをするなどの手立てをとった。

- ・「子どもの思いをいかにふくらませるか」という研究から、さらに、そこにはたらく創造的な技能に焦点を当てて研究を深めている。「きれいにぬる」、「きれいにつける」といったことではなく、自分の表したいことが表せることを大切な子どもの姿とし、教師はそうしたことを見ていくことが大切である。

- ・自分の思いを材料の特徴を生かして工夫して表していくことを創造的な技能ととらえている。「美しさ」を教師はどうとらえ、評価規準を設定し、子どもはどのようにその視点から表現主題をもっていったのか。

→本題材では「バランス」や「奥行き」といったことが「美しさ」の一つであるとしたが、子ども自身が「いいな」と思ったり、よさを感じたりしたことも「美しさ」と考えた。子どもは活動しながら自分の表現主題をかためていった。子どもの活動を見ながら教師はその子なりの「美しさ」を見取った。子どもたちは、つくったり、話し合ったりする中で「美しさ」についてとらえているようだった。

- ・創造的な技能は、発想や構想の能力と相互にはたらき、活動のスパイラルの中に入り込んでいるもの。子どもの活動する中で、発想と技能ははたらいっている。

- ・作品を見ると、子どもたちの力がよくはたらいっていることが感じられる。つまり子はいい

- かったのか、また話し合いの中で助け合うような場面はあったのか。
 →つまり子どもはたくさんいた。子ども同士でアドバイスしながら助け合う場面が見られた。バランスがとれずにいる子には、教師が一人ひとり対応し、形を支えるなどのアドバイスを行った。
- ・作品から、建物というよりは魅力的な立体という印象を受ける。自分が小さい存在になって、自分の表したもののなかの姿をイメージすることもできる。「自分の手でも思考している」ということで発想や構想の能力と創造的な技能は、切り離せないものである。

3 まとめ

自ら思考して課題を解決する力が弱いことから、思考力・判断力・表現力の重要性とともに、図画工作科の4観点を通して、自らが考えて、価値を自ら生みだしていく力を育てることが重要である。

本題材では、“自分だけの”という思いが表れている。川崎の研究会で示されている活動のスパイラルの中に技能があり、発想と技能の相互の活動の中で「自らつくりだす喜びを味わう」ことが大切になる。教師の思いや手立てが、子どもが発想したことが自分の思った通りに形になっていくことにつながっている提案である。

子どもが表現主題を見付ける過程で、言語活動が効果的に取り入れられていた。また、指導者の指導で子どもは必要な知識を身に付けていた。線という材料に絞り、そこから子どもの発想や構想の力を培っていた。

指導すべきことをきちんと指導した中で、子どもの力を発揮できるようにしていくことが大切。意図的に言語環境をつくり試行錯誤する時間を十分にとっていたことで、子どもは自らの表現に向かっていた。

まとめの時間に自分や他者のよさや美しさを感じるとともに、何を学んだのかを自らが振り返ることも大切なこと。

【グループ協議 まとめ】

・提案1より

- ・自然に話し合い活動ができるよう意図したグループづくり。何のためのグループなのかを意識する。
- ・空間設定の仕方(安全に安心してできるようにしてあげる 細かな手立て)が大切。
- ・発想を広げるためにも造形遊びは大切(いろいろな素材に出あわせる)。友達とのかかわりの中で育ってくることもある。・つくるのはまずおいて材料にふれさせることが大事。
- ・子どもの姿をどうとらえるか「創造的な技能」等の視点から見えていくことが必要。

・提案2より

- ・スパイラルな指導によって思考の深まりが期待できる。
- ・道具を生かすためには技能が必要。低学年の時から自然な形で身に付けていけるとよい。自分の思いが生かせる。
- ・写真を使用した題材との出あわせ方が子どもの思いをつかみやすい。(こういうものもいいのかと思わせてあげる) 目で見たり、さわってみたり、ビデオをみたりすることも効果的。
- ・つくりながら会話できるグループ3～4人の形態がよい。
- ・木材を発泡スチロールにさしたり、輪ゴムなどでとめる方法もある。どんなことができるだろうといったことを考え、素材の可能性を追究することができた。
- ・活動の途中で友達のよさを認め合い、鑑賞を取り入れたのがよかった。

・二つの実践を通して

- ・言語活動→偶発的→意図的(いつ・どこで・どのように)授業計画に組み込んでいくことが大切→見取り(どのように)→評価(適切な支援 アドバイス)→子どもも思いを表せてうれしい(学びの保障)。よき学びのサイクル
- ・各教科の目標の具現化のために言語活動がある。見取りのための声かけは大切。
- ・「表現と鑑賞の一体化」鑑賞は特別に時間を設定するものばかりではない。
- ・言語活動の充実というと、活動の中に自然の発言が多く、充実させるためにはやはり場を設定していくことが大切。
- ・イメージをつくっていくための言語活動→具現化するために必要。
- ・子どもの直接的言語活動をとらえようとする意識。
- ・思ったことを字で表現したり、言葉で表現(外言)したりすることが大切。

課題点・改善アイデア・自校での実践等

- ・共通事項 小学校では「自分の思いを」というとらえがあるが、小学校時代に図画工作で色や形やイメージについて言語化することで、自分の思いを具体的にとらえられるようになり、中学校に行った時の「色や形から受ける感じ」の一般化につながる。
- ・子どもが創造的思考に行き詰ったとき、言語がその助けの一つになる。

- ・内言はグループで活動するとより出てきやすい。→本提案の場の設定では広がりを得られにくいのではないかと。友達とのかかわり、言語を使った子どもの発想によって広がる。
- ・「こうしたい」「ああしたい」が高ければ高いほど言語に表れる。
- ・言語→表現に対する意欲をより強くもたせること、それが言語に表れる。そして言語活動が充実していく。鑑賞にも影響していく。表現、鑑賞→表裏一体
- ・児童の成長にあった色・形に対する目を育てておいてやること。それが表現に生かされる。
- ・グループ構成(生活、目的、男女) コミュニケーションも変わってくる。
- ・一人ひとり 没頭して活動する子の配慮も考えてあげたい。
- ・どんなグループでも話し合いができるようなクラスの間関係づくり
- ・教師のねらいをしっかりと(主に発想や構想の能力、鑑賞の能力を高めるため)言語活動を取り入れること。
- ・すべての子どもの言語活動をとらえることが難しい。
- ・言語活動の充実として「図工ノート」を活用している先生もいる。
- ・会話の記録は教師一人で難しい。ビデオ、IC レコーダーを利用するなど実践したデータを残しておくこともできる。
- ・鑑賞 低学年でつくったものを動かした。言語活動を意識して工夫した点などを伝え合っても楽しい場になった。
- ・途中で見合う時間 アイデアをもらった子、くれた子、双方ともよい時間になる
- ・教師対子ども やりとりは他の子も聞いて参考になっている。
- ・作品をマイクロスコープを使って見るのも楽しそう。
- ・どういうときにどういう場面で子どもに言葉かけをするか→その子のためになるかならないか、子どものことをよく知っていないとできない。
- ・教師の言葉が豊か→子どもの言葉かけも豊かになる。
- ・鑑賞・・・国語的になってしまう。作業と言語活動の相互作用で作品が出来上がっていく。
- 文で書けない子は言葉を聞いてあげるなど、いろいろな方法をとっていく必要がある。
- 子ども同士のつぶやきを途中のプロセスでひろってあげることが大切。
- ・本物を見せる。(美術館、本等)
- ・鑑賞と表現は一体となっている。みて感じ取り、また作品に表現していく。
- ・いいことを思いついたとき、発想がふくらむ価値づけをしてあげる。「いいことみつけたね」等。
- ・図鑑だと平面的、立体物をつくる時は低学年だと難しい。
- ・つぶやきの共有の難しさ
- 形、色に着目してイメージがふくらんでいる子に発表させる。
- 価値づけて
- ・自分の表現したい思いを言語化することの必要性。
- (自校での実践)
- ワークシートを使って次の時間までの構想を立てるなどの工夫をしている。
- 実践したデータを残しておく。
- 前年度の作品を提示できる。(鑑賞)思いや発想がふくらむ。言語活動の充実につながる。
- ・イメージの広がらず、活動が止まってしまう子や、思いが絞られてしまいアイデアが豊富に浮かばない子に対して、材料や活動、言語が大きな役割を果たす。
- ・ワークシートの記入については内言が行われている。
- ・声かけのタイミング、効果的に見える化する。(鑑賞)ことも大事である。
- ・子どもは自然と言語活動している。やみくもに静かにさせる必要はない。

〈まとめ〉

- 二つの提案は、ともに「線材」を使った題材であるが、ねらいは、A表現(1)と(2)それぞれである。作品を見る際には、作品と対話し、この子はどのようなことをしたかったのか、どのような力が発揮されているのかを見ていくことが大切。どういうねらいをもっていたのか、どういう子どもを育てたかったのかを教師はしっかりとつことがとても大事になる。子どもに寄り添って、目の前の子どもにどのような力を付けたいのか、そのためにどのような活動が必要なのかを吟味すること。
- また、図画工作科における言語活動を再確認する機会となった。主に発想や構想の能力、鑑賞の能力を高めるために意識的に言語活動を取り込んでいく。子どもの学びにそった形で題材づくりをしていただきたい。